大和

平成十六年度

第41号

京都大学合気道部
京都大学合気道部水輪会

柔術師範（玄修会主催にして）、「真伝合氣口訣奥秘」など大東流の書籍も多く、武道と神道の関係に一家言をお持ちです。

植芝盛平翁先生の宇宙観、古神道と合氣道の技法の関係、開掌伝（合氣道の梅の花、大東流の朝顔）、古事記と合氣道の関係などにも言及し、更には、武道の極意である、丹田、氣、氣海（けかい）、及びその操作訓練法にも及ぶ。まだ買える、お勧めの本。

一〇．**「氣の妙術」** 加来耕三著、出版芸術社、一九〇〇円、平成八年二月発行。本当のところ、教えたくは無かった、お勧めの本です。

加来耕三（かく　こうぞう）氏、歴史家・作家、奈良の古流剣術（東軍流）の宗家の生まれ、合氣道研鑽者、熊本県人吉市に伝わる、（肥後）タイ捨流剣術の（名誉）免許皆伝、ホームページ

http://www.kaku-kouzo.com/

経済財界相手の講演会でも活躍。一九五八年生まれ（＝小生よりも一歳若い、が、要は同年代）。

「氣の妙術」は誰でも使える。中国の氣功・インドのヨーガそして、植芝盛平翁先生や中村天風先生など、多くの先覚者が実証した「氣」の効用！「氣」のメカニズムが一目で解かる画期的ガイド・・・・と書籍の帯封には書いてあります。

目次を紹介しますと、「序章　触れずに人が飛ぶ、」から続き「一五．氣の妙術の体現者＝植芝盛平、一六．神道の氣と合氣道、一七．氣の科学的研究、一八．氣と心の世界、一九．合氣道の極意、終章　氣の妙術　合氣道道主（吉祥丸先生）が語る二一世紀の氣」、全　三六四ページです。

合氣道修行者の方は、物理的な身体の鍛錬・稽古だけではなく、「氣」を研究される為に、是非ご一読されることをお勧めします。（尚、この文章では「氣」を使っていますが、本では「気」の活字を使用しています。）

以上

無題

14代　Volker Stanzel

今年の四月、ある日、「八月末、ぼくは一生最後の合気道の稽古になるよ」と言い、フランクフルトの友達をベルリンに招待したことがあった。彼は信じられないと、「あんた、もう三十年以上合気道するんで、何で急にやめようとするのか」と聞いた。たしかに言えないほどかなしいものだ。ぼくは、１９７２年、留学生として来日し、ヒッチで九州の合気道の先生と知り合いになって、すぐ、合気道というもの、自体のものとしたい、そういう風に考えることになってしまった。

十四代のものとしてはじまり、最初、週一、二回やってよいと思ったけれども、すぐ「あんた、こまるよ」と言われ、やっと初段を取ったのだ。１９７５年、ドイツのフランクフルトへ帰国して、ぼくのふるさとの一番最初の合気道の先生としてくらして、大学生活をしてきたのだ。日本より多くて、というのは毎日、ときどき、日に二、三回教えたわけで、弟子が多くて出来て（あと自分で日本へいって、たとえば岩間の斎藤先生の同場で弟子してきた。お互いに結婚して、五、六段までのぼり、今ドイツで自分の同場をもつ人たちもいるのだが）１９８２年、在日ドイツ大使館に仕事するまで続けることになってしまったのだ。

東京の三ビシ同場で、京大合気道部水輪会の名誉部長の清水郁夫先生と稽古し、二段を取ることになった。そのうち、日本のあちこちの同場をさがしてみて、その先生の[illegible]

気道じゃないか？」ということだった。

八月、最後の稽古かも分からない。といっても、より深いレベルで、合

研究される為に、是非ご一読されることをお勧めします。（尚、この文章では「氣」を使っていますが、本では「気」の活字を使用しています。）

東京の三ビシ同場で、京大合気道部水輪会の名誉部長の清水郁夫先生と稽古し、二段を取ることになった。そのうち、日本のあちこちの同場をさがしてみて、その先生のところで稽古したのだ。三年立って８５年から二年間南イエメンのアデン市で海辺のすなで西洋の外交官に合気道を教えみた。又、１９９０～１９９３年まで、北京のスイスオテルのaerobics studioで教えたわけになった。ドイツで帰えて、この十一年、ドイツの外交官の「合気道部」を作り、毎週金曜日朝七時から、外務省の近にある学校の運動場で、稽古やっているのだ。

そういうふうになってきて、やはり、合気道と言うものは自体の物になってきたのだと言っては良だろうではないか。とにかく十一年間、外交官にとって例外的に長い間本国で仕事したのだが、今回それがおわり、この九月から北京へてんきんされてきたのだ。そして、ペキン大使館に近く、同場がない、aerobics studioで教えるのは、今の仕事で、妥当的でない。ペキンの後、おそらく他の国へでんきん。実、合気道をつづける可能性が少くない。だからといって、３２年の合気道で、この八月は最後であろう。まだ想思できないことだ。かなしいと言うほかはない。でも、それは本当か？　実に終りのか？　本当の気持ちを言うと、３２年して、合気道の本格はあるでい度まで、自分のせいかくの一部になってきたと感じていわけだ。一緒のことになったのではないかもしれない。だんだんと気がいつたのだが、例えば、チェッスをやるとき、急に「合気道的」にやればかつのだ。運てんすれば「合気道的」でよりスムースになる。仕事のやり方、日上生活、全部「合気道的」とよばれるしかたになってきたことだ。けっきょく合気道は自分のせいしんに入りこんできたのだ。

この間、ドイツの外交について記ことを書いたことがあった。例のフランクフルトの友達それをよんで、急に言ったのは、「あんたの政しそうも合気道じゃないか？」ということだった。

八月、最後の稽古かも分からない。といっても、より深いレベルで、合気道と自分もう離られない。一生にそうであろう。へなのは、それはただの１９７２年の一つのヒッチの出合のけっかということだ。

Volker Stanzel　２００４年八月三十日　Berlinにて

南の小島にて～その３

19代　亀井孝

先日会社の総務部門の女の子から、３年有効のＶＩＳＡがもうすぐ切れますが、１年延長も２年延長も更新費用はあまり変わらないからとりあえず２年にしておきますという連絡があった。そういえば、シンガポールに赴任したのが２００１年の11月。早いもので、こちらへ来てもう３年が過ぎる。最初のＶＩＳＡ取得には、大学から卒業証明書を取り寄せたりして手間が要ったが、今回の延長はインターネットで簡単に更新できるとのこと。とりあえず２年延長と言うのも、何か軽く扱われているなあいう印象だが、こうして大和の原稿を書けるのも珍しい体験がいろいろとできるシンガポールに居るからこそ、会社には感謝せねばならない。

さすがに３年も居ると、シンガポールの生活にも新鮮味が薄れてきたので、今回はシンガポール以外の国を少し紹介しようと思う。下名のビジネステリトリーは東南アジアと南アジアで、営業という仕事柄周辺国にもよ